

大学図書館における貸出履歴の分析

本田 咲美

貸出サービスは図書館サービス全体の中でも最も利用されるサービスであり、最も基本的なサービスである。先行研究から、利用者の需要が図書館側の想定していたものとは異なっていたという結果が得られており、貸出サービスを充実させるためには、貸出履歴を分析することが有効であると考えられる。

本研究では筑波大学附属図書館の 2006 年度から 2010 年度の貸出履歴データを用いて、学生の利用状況、蔵書の利用状況を明らかにすることを目的として分析を行った。

1 年間の月別貸出回数の変化について、学生の試験期間にむけて貸出回数が増加し、休暇期間に貸出回数が減少していることがわかった。また、すべての学類でそれぞれの専攻の分野の主題の図書が最も利用されており、学生の専攻と貸出の多い主題分野には相関があるということが言える。一方、学年が上がるにつれて文系の学類は貸出が増加し、理系の学類は貸出が減少すると予想していたが、4 年次で貸出が減少する文系の学類もあり、理系の学類は 3 年次、もしくは 4 年次に貸出回数が最も多くなっているという予想と異なる結果が得られた。綱目ごとに蔵書回転率を求めたところ、オブソレッセンスを観察することができ、類目別の蔵書回転率の減少のグラフと、綱目別のオブソレッセンスのグラフに違いがある主題分野があることも分かった。

貸出回数が多い順に図書を並べた時の累積貸出回数について、約 3% の蔵書で全体の貸出の 80% をまかなっている結果が得られた。従来説かれていた、「蔵書の 20% で利用の 80% をまかなえる」という法則が筑波大学附属図書館では当てはまらず、さらに少ない図書で 80% の利用をまかなえることが明らかとなった。蔵書回転率の減少の仕方は、出版年が比較的新しい図書に関しては対数近似が当てはまり、出版年が比較的古い図書に関しては線形近似が当てはまった。

以上の結果から、筑波大学附属図書館の特徴として、「①学生の試験期間に貸出は増加し、休暇期間には貸出は減少する、②学生の所属する学類の専攻と借り出す図書の主題には密接な関係がある、③図書は出版年が古くなるにつれて、利用が減少し、その減少の仕方は、図書の主題によって違いがある、④一部の図書に利用が集中している、⑤蔵書の 20% で利用の 80% をまかなえる、という法則は当てはまらず、もっと少ない蔵書で利用をまかなっている、⑥出版年別貸出回数について、図書の出版年が新しいものには対数近似が、図書の出版年が古いものには線形近似があてはまる」ということがいえる。

本研究で得られた結果は、今後の図書館サービスの展開において役立てられる結果となると考えられる。今後も継続した調査を行うことが大切であると考えられる。

(指導教員 逸村裕)